九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

紫式部集所載歌の詠作年代について

中島, あや子
九州大学大学院修士課程

https://doi.org/10.15017/12134

出版情報：語文研究. 38, pp.1-15, 1975-01-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紫式部集所載歌の詠作年代について

中島　あや子

一

紫式部の手に成った作品は、周知のように源氏物語、紫式部日記、紫式部集の三があるが、従来前の二の研究密度にひきくらべ、式部の伝記に最も関わると思われる家集について、その方法の困難さのため、あまり詳しい考察が為されていなかったようであるが、与謝野晶子氏「紫式部新考」（『太陽』昭和三年一・二月）、河岡新兵衛氏「紫式部の人としての生活」（『国語と国文学』昭和四年十月）、更に宮部清氏「紫式部集に就いて」（『国語国文』昭和十一年九月）と家集に関する研究が公にされ、最近では、岡一男、角田文衛両氏、今井源衛先生、竹内美千代、南波浩、清水好子諸氏によって次々と研究業績が発表され[注1]、現在ではかなりの段階にまで研究が進んできている。

拙稿は、これらの先学の教えに従いつつ、家集に今一度筆者なりの検討を試みたものであり、具体的には、家集中、従来の研究で詠作年代未詳又は諸説分かれる歌を採り挙げ、その前後歌との関わり、及び源氏物語歌との類似関係を基[注2]として、いくらかの解決を与えてみたいと考える。尚、本稿執筆に当って、

一、家集は一類本中の善本実践女子大本を底本とし、校異は二類本の陽明文庫本によった。（両本ともに『私家集大成』中古Ⅰの本文による）

二、実践女子大本にみえない陽明文庫本の歌は後に一節を設けて、その詠歌年代を検討した。

三、源氏物語、紫式部日記の両本文は日本古典文学大系によった。

二

そこで　最初に従来の諸説を整理して、家集一二六首の詠作年代を表にし、その明不明を示すと次のようになる。（～印は贈答歌、組歌をしるす）＊印を付したものが従来、詠作年代未詳又は諸説分かれる歌で、（　）内の年代は第三節で検討した結果である。尚、詠作の月日、季については、詞書、歌趣、及び紫式部日記、記録類の裏付けにより明らかなもののみを記し、それ以外は詠作年に止めた。

1 長徳元年七月十日
2 長徳元年九月晦日
3 （寛弘四年春）
4 5 長徳元年七、八月
6 7 長徳元年秋
8
9 10 長徳元年秋
11 12 長徳元年十一月
13 長徳二年夏
14 長徳二年三月朔日
15 16 長徳二年秋
17 長徳二年
18 19 長徳二年春
20 長徳二年
21 長徳二年
22 長徳二年夏
23 長徳二年
24 長徳二年
25 26 長徳二年冬
27 長徳二年冬
28 長徳三年春
29 長徳三年
30 長徳三年
31 長徳三年
32
33 34 長保元年正月十日
35
36 37 長保元年三月
38 長保元年四月
39 長保元年秋
40 41 長保四年春
42 長保四年春
43 長保四年春
44 45 （長保元年、二年）
46 （未詳、寛弘五年以前）
47 （同　右）
48 長保四年
49 50 長保三年秋冬
51 長保四年春
52 長保四年七、八月
53 長保四年
54 55 長保四年
56 寛弘三年十二月廿九日
57 58 寛弘四年春
59 寛弘四年正月十日
60 61 寛弘四年三月
62 寛弘四年
63 64 寛弘四年五月五日
65 寛弘五年五月五日
66 67 寛弘五年五月五日
68 69 寛弘五年五月六日
70 71 寛弘五年五月六日
72 73 寛弘五年四月七、八日
74 75 寛弘五年五月
76 77 寛弘五年七月
78 79 （長保二年夏）（同　右）
80 長徳三年秋冬
81 長徳三年秋冬
82 長徳三年秋冬
83 84 長徳四年夏
85 長徳四年冬
86 寛弘五年九月十五日
87 寛弘五年九月十六日
88 89 寛弘五年十一月一日
90 91 （長徳三年秋）（長徳三年九月晦日）
92
93 94 長保二年秋
95 96 （長保二年六月）（長保二年九月晦日）
97 98 （長保二年秋冬）
99 寛弘五年十一月廿二日
100 101 （寛弘五年春）
102 （同　右）
103 （寛弘五年四月）
104 寛弘四年四月十九日
105 （寛弘五年正月三日）
106 107 （寛弘六年十一月）
108 109 長保二年七月一日
110 111 長保二年七月七日
112 長保二年
113 長保二年秋
114 寛弘五年九月九日
115 116 寛弘五年十月
117 118 寛弘五年十一月
119 寛弘五年秋
120 121 長和二年七月廿七日
122 123 長和二年冬
124
125 長和二年
126

三

以下、右表に挙げた詠作年代未詳歌に順次検討を加えていくこととする。

一、　さうのことしはしとかひたりける人、まいりて御てよりえむとある返事に

（3）つゆしけきよもきか中のむしのねをおほろけにてや人のたつねん

詠作年代に問題のある歌で、その間の事情は南波浩氏の「千載集紫式部歌の詞書をめぐる問題」（『国語と国文学』昭和四十二年六月）に詳しいが、（1）～（12）の長徳元年詠歌の一部として、その年の秋の詠とする岡説に、今井先生がこの歌を収める千載集の詞書「上東門院に侍りけるをさとに出でたりけるころ女房のせうそこのついでに箏のことにまうでむといひて侍りければ遣はしける」を資料に、宮仕以後の作かとの疑問を提出され、年代順を超えた配列の理由を、（2）の歌の「虫の音」による類纂に求めておられる。[注3]この千載集の詞書を挙げて紫家七論が「此箏の伝授にても、其楽才おしはかるべし」としていることは諸氏の引かれるところであるが、式部の琴の才については、日記の寛弘六年のいわゆる消息文中の記述「風の涼しき夕暮、聞きよからぬひとり琴をかき鳴らしては、なげきくははると聞き知る人やあらむと、ゆゆしくなどおぼえ侍るこそ、をこにもあはれにも侍りけれ」との述懐中の何気ない描出や、作者の投影の大とされる明石上が箏の琴の名手であったことでも知り得るところである。が、物語の明石上が父入道より箏の琴の弾じ方を教えられた如く、式部が父為時から幼少より学んだとしても、長徳元年の作者の年令は、岡氏説二十四才、今井先生説二十七才となり、[注4]いづれにしても若年であり、又当時の受領階級とはいえ貴族の息のかかった家の子女の奥住みの生活状況から推すに、箏の琴の名手との世評を耳にして教えを請う人のあったことは如何であろうか。むしろ、出仕以後その才を式部に見た同僚女房が、式部の里居の間に訪れて教授を賜わりたいと消息したとする千載集詞書の方が自然ではないか。

具体的な詠歌年代は決定し難いが、次の事実により、（57）「とちたりし」～（61）「つれ〳〵と」と初出仕の翌寛弘四年春、[注5]かなり長期間宿下りをしていた頃としてよいかと考える。即ち、横笛巻に、

つゆしげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ蟲のこゑかな

の歌がある。主人柏木を失ってさびれた一条邸で昔に変らぬ横笛の音を偲ぶ御息所の詠であるが、右の歌集の歌との類似が注目され、家集が先で物語の歌が後であることも明らかである。用語上、「つゆしけきよもきか中」「虫のね」がほぼそのまま「露しげきむぐらの宿」「蟲のこゑ」に活かされており、わびしい蓬屋との発想は両者に共通する。これより、家集の歌もまた夫を失った蓬屋でのわびしい寡婦生活での詠作とみるのに有利な材料と考えられる。日記にみえる寛弘五年十一月、中宮還御まぢかの大規模な冊子作りが源氏物語の幻巻までの清書であるとすれば、[注6]この歌が初出仕の翌寛弘四年の詠であり、それを下敷きとしてそれより程経ぬ時期に横笛巻中のかの歌が成ったと推察

し得るのである。

ここで、初出仕時の詠（56）「身のうさは」以前に位置する関係上、少しく触れておきたいものに、（44）～（47）の歌絵という題下に類纂された四首がある。先づ、（44）「なき人に」（45）「ことはりや」の贈答歌は、相手を宣孝とする清水好子氏の説に従い、よって宣孝との結婚期間中の長保元年、二年の詠としてよいと考える。（40）「くものうへ」（41）「なにかこの」及び（42）「ゆふきりに」（43）「ちるはなを」と宣孝の死を内容とした贈答の後、その連想下に生前の夫との、歌絵を見ての贈答を配し、更に歌絵の題下に、それ以後（46）（47）と続けたものと解される。次に、その（46）（47）の二首を検討するが、先づ、

ゑに、むめの花見るとて、女つまとをしあけて二三人ゐたるに、いとさたすきたるおもとの、つらつゑついてなかめたるかたあるところ

（46）春の夜のやみのまとひにいろならぬこゝろにはなのかをそしめつる

の歌であるが、歌絵による類纂である以上、詠作年時の決定は無理であるが、詞書の「いとさたすきたるおもと」や歌の内容に式部自身を託したものがあるとするなら、あまり若い時期の詠とは言えまい。又、竹河巻の蔵人少将の詠歌、

人はみな花に心を移すらん独ぞ惑ふ春の夜のやみ

にこの歌との措辞の酷似を看取できる。両者には「春の夜のやみ」が共通し、「こゝろにはなのかをそしめつる」には「花に心を移すらん」が対応していて、家集の老いの自覚、物語における大君恋慕の敵薫（花）への憂慮と、両者の状況は異なるが、措辞の類似は無視できない。そうであるなら、（46）は竹河巻の執筆年代（前述の寛弘五年十一月の姫子作りが幻巻までの清書とすると、それ以後早い時期）より以前の詠歌と一応言えるのではあるまいか。又、両者の類似は、今井先生の指摘された、家集（36）「（詞書省く）おりてみはちかまさりせよもゝの花おもひくまなきさくらおしまし」と源氏物語「（宰相の君）折りて見ばいとゞ匂ひもまさるやと少し色めけ梅の初花」「（玉鬘の長女）桜ゆゑ風に心の騒ぐかな思ひぐまなき花と見る（傍線今井先生）」との類似[注7]とともに、竹河巻の他筆説を否定するに有利な材料であろう。続く（47）「さをしかの」は詞書の「おなしゑに」より（46）と同時期のものである。

二、　ひさしくをとつれぬ人をおもひいでたるおり

（78）わするゝはうき世のつねとおもふにも身をやるかたのなきそわひぬる

（四行分空白）

返し

（79）たかさともとひもやくるとほとゝきすこゝろのかきりまちそわひにし

初出仕時の詠（56）「身のうさは」から（77）「しらつゆは」まで、寛弘三年～五年と宮仕時代の歌がほぼ年代順に配列されているが、前掲の二首に続く（80）「ましもなを」～（82）「こころあてに」は父為時に伴われた越前から単独で帰京する途上の歌群で、長保三年秋冬の詠と考えられる。そこで（78）（79）の詠作年時が問題となるが、明らかに（79）は（78）の返歌で

はなく、両首ともに式部の詠歌である。因みに、「（四行分空白）」及び「返し」の箇所を他本でみるに、陽明文庫本では「返しやれてなし」とあり、空白、「返し」ともにないが、桂宮本に「返しやれてなし」とあり、一行空白で「返し」とある。桂宮本よりみるに、（78）の答歌と（79）の贈歌が欠落しているものと考えられるが、いづれも相手は同一人物としてさしつかえないようである。そこで贈答の相手であるが、（57）の詞書「ほのかにかたらひける人」と同一人物として、それを式部が宮仕以後に出会った宣孝以外の男とする説が今井先生[注8]、角田文衛氏、竹内氏により提示されているが、

またいとうゐ〳〵しきさまにて、ふるさとにかへりてのち、ほのかにかたらひける人に

（57）とちたりしいはまのこほりうちとけはをたえの水もかけみえしやは

かへし

（58）み山へのはなふきまかふたに風にむすひし水もとけさらめやは

の贈答歌は、若し相手が宣孝以外の男であるとすれば、「ほのかにかたら」った程度の男に対して、そのあと式部が自身からこうした積極的態度に出るであろうか。ここは、（56）で初出仕して何らかの事情（恐らく精神的病悩であろう）ですぐさま宿下りした式部が、彰子邸で「ほのかにかたら」った同僚女房に親しみを請い、彰子の人徳を崇えて式部の帰還を促す女房の返しとする清水説が適当であろう。とすれば、（78）（79）の相手は「ほのかにかたらひける人」以外の人物となるが、ここは明らかに男の夜がれを嘆じたものであるので、必然的に宣孝が浮かび上がってくる。（（49）～（51）と宣孝死後、すぐさま懸想してきた男とのその後の進展は家集の限りではみられないので、これはとらない）宣孝とすると、（78）の詞書「おもひいてたるおり」との一文が不審であるが、新婚時代を経、段々と夫の夜がれが頻繁になった頃、式部がそれに慣らされ始めた時期の詠とすれば解決がつくのではなかろうか。（78）（79）ともに宣孝の夜がれが目立ち始める長保二年春の詠としてよいかと考える。従来指摘されているように、（80）～（82）と宣孝との結婚を目した越前からの帰京の折の歌群の前にこの二首が位置していることは、こうした推論の一つの傍証ともなり得よう。

因みにこの（78）の歌は、梅枝巻の、

つれなさはうき世の常になり行（く）をわすれぬ人や人に異なる

と、仲が難航している雲井雁への恋情を歌った夕霧の詠と趣を一にしている。蓋し、夫の夜がれを諦めつつも尚忘れ難い、この折の自身の悲嘆を、雲井雁を諦めきれない夕霧の情に移したものであろう。更に又、（79）の歌は蓬生巻の末摘花の、

年を経てまつしるしなき我（が）宿を花のたよりにすぎぬばかりか

と久しく訪れない源氏を詰った歌と同趣であり、「たかさともとひもやくる」と「まちそわひにし」の結びつきが、「まつしるしなき」と「我（が）宿を花のたよりにすぎぬばかりか」の如く、上下句転換した形で対応関係が認められる。これも自身の経験を末摘花に託したものとみてさしつかえあるまい。若し

相手を宮仕以後、式部の出会った男とした場合、（78）と梅枝巻歌との先後関係は微妙であるが、少なくとも（79）を踏まえた蓬生巻歌の事実は、蓬生巻の早い執筆時期[注9]を考慮すれば、宮仕以後の男性関係との説には否定的であり、宣孝相手の贈答とみるに有利な材料であろう。

三、

たまさかにかへりことしたりけり人[イ]、のちに又もか
、さりけるに、おとこ
（90）おり〳〵にかくとは見えてさゝかにのいかにおもへは
たゆるなるらん
返し、九月つこもりになりにけり
（91）しもかれのあさちにまかふさゝかにのいかなるおりに
かくとみゆらん

寛弘五年詠の歌群（86）「めつらしき」～（89）「あしたつの」に続き、（92）「いるかたは」～（94）「おほかたの」の長保二年秋の対宣孝の贈答歌の前に位置する二首であるが、従来、「たまさかにかへりことしたりける人」は出仕以後に式部の会った男とみられるが、少しく疑問である。（86）～（89）の四首、寛弘五年詠に直続する関係でそのように見られるのであろうが、この四首は、敦成親王誕生の産養五夜（寛弘五年九月十五日）の（86）、翌夜（87）、五十日夜（同年十一月一日）の（88）（89）と、いづれも公の行事の式部の詠であり、（90）（91）はむしろ私的な歌詠として（92）以下に関わるものと考えられる。そこで、（92）～（94）が長保二年秋、宣孝の夜がれを詰る歌群であり、後述する（95）「かきほあれ」が同長保二年夏誕生した賢子を詠んだものと思われるので、この（90）（91）の贈答は、相手を宣孝以外の男とするより、結婚以前の式部宣孝の贈答とみるのが自然である。結婚以前の宣孝との贈答（90）（91）、続く結婚時の夫の夜がれ（92）～（94）、更に夫の夜がれの頻繁な頃、生まれた我子をみつめる母の哀感（95）と、作者の宣孝を念頭に置いた連想線上の配列であると考えるのが適当であろう。私は、（28）「春なれと」～（31）「くれなゐの」の長徳三年の宣孝との贈答あたりの、靡くともなく靡いていく式部の詠み口に通ずるものをこの贈答にみるので、長徳三年秋の宣孝との結婚を心に決めつつある頃の式部と宣孝との贈答としてよいかと考える。

また、賢木巻の紫上の歌、

風吹けばまづぞ乱る、色かはる浅茅が露にかかるささがに

が、この二首と同趣であることも注目される。「浅茅」と「ささがに」の結びつきは、管見の限りでは他の歌集に例をみないので、式部独自の発想とみてよいのではあるまいか。両者の措辞の類似は顕著であり、家集の歌を素材として賢木巻の歌がなったとみてさしつかえあるまい。とすれば、賢木巻の早い執筆年代からみて、宮仕以後の男性関係とする必要はないであろう。

続いて、（99）「おほかりし」以下の寛弘年間詠の前に位置する（95）～（98）について少しく触れておく。先づ（95）は前述したように、結婚以前の宣孝との贈答（90）（91）、宣孝の夜がれの難詰（92）～（94）に直続するものとして、（92）～（94）と同時期の「長保二年夏賢子の生まれて間もないころの作」[注10]との説が、「（詞書省く）かきほあれさひしさまさるとこ夏につゆをきそはん秋まてはみし」の歌趣と賢子の出生年代（宣孝

との結婚が長徳四年暮と考えられるので、その一年余後)を考慮するに、適当な詠作年代と考えられる。夫の夜がれが原因する苦悩を胸に、生まれた我子を淋しくみつめる式部の姿を髣髴とさせるものがある。

(96)に移るが、「とこ夏」(95)「はなすゝき」(96)の季の関連、及び詞書の六月(95)、九月晦日(96)の月順により先後に配列されたものと考えられるが、前の(95)と(96)「(詞書省く)はなすゝき葉わけのつゆやなにゝかくかれゆく野へにきえとまるらむ」の歌趣は基調が一であるので、両者はあまり隔っていない時期の心情独白と考えられ、(95)と同年、長保二年九月晦日の詠歌としてよいかと考える。詞書の「ものやおもふと人のとひたまへる」及び左註「わつらふことあるころなりけり」は、夫宣孝の夜がれに悩む式部を考えるに無理ではない。

最後に(97)「世にふるに」(98)「こゝろゆく」の二首であるが、前挙した(96)の左註は同時に(97)(98)の詞書にもなると思われるので、「かひぬまのいけ」を詠んだこの二首は、(96)の詠歌年代とほぼ同じ頃、長保二年秋冬のものと考える。

四、

中将せうしやうと名ある人ゝの、おなしほそとのにすみて、少将のきみをよな〳〵あひつゝかたらふをきゝて、となりの中将

(100)みかさ山おなしふもとをさしわきてかすみにたにのへたてつるかな

返し

(101)さしこえていることかたみゝかさ山かすみふきとく風をこそまて

こう梅をおりて、さとよりまいらすとて

(102)むまれ木のしたにやつるゝむめの花かをたにちらせくものうへまて

う月にやへさけるさくらの花を、内にて

(103)こゝのへにゝほふをみれはさくらかりかさねてきたるはるのさかりか

日記、権記、栄華物語等に記事のみえる寛弘五年十一月二十二日の五節時の詠(99)「おほかりし」に続き、御堂関白記、権記等に記述のある寛弘四年四月十九日、賀茂祭の折の詠(104)「神世には」の前に位置する四首で、やはり詠作年代が判然としていない。

先づ、資料のある(103)から検討していくこととするが、この一首の作歌事情は、当時かなり有名であったらしく、伊勢大輔集、古本説話集、古事談等に詳しいが、要約すると、奈良興福寺から毎年一度八重桜が中宮に持参されるが(この年の持参は異福寺権別当扶公僧都)、それを受け取る光栄を式部が今参りの伊勢大輔に譲り、その折詠んだ、百人一首にも採られている「古へのならの都の八重桜けふこゝのへに匂ひぬるかな」との伊勢大輔の歌の返歌として、中宮に代わって式部が詠んだものがこれである。この歌の詠作年代を考えるに当って、伊勢大輔の初出仕年が問題となるが、これについては早く保坂都氏に御指摘がある。[注11] それによると氏は、伊勢大輔集八十五番歌の詞書(和泉式

部初出任を内容とする）により、伊勢大輔の出仕は和泉式部のそれより以前であることを確認され、更に、和泉式部集（巻三）の祭の少前、初出仕とおぼしき和泉式部と中宮との贈答を資料とし、又敦道親王の服喪期間を考慮して、和泉式部の彰子邸初出仕は、「寛弘六年の加茂祭の少前」とし、故に「伊勢大輔の出仕は寛弘五年の春頃か」と結論しておられる。この年は即ち（103）の詠作年代を示すものでもあるが、式部の側からそれを確認することが可能である。即ち、式部の初出仕を前述の通り、寛弘三年十二月二十九日とすると、この歌の詠まれた年は、式部が多少とも宮仕えに慣れており、今参りの伊勢大輔に八重桜を受け取る光栄を譲るという条件を満たす寛弘五年以降の年の四月となる。そこで、（99）は寛弘五年の詠であり、（104）の寛弘四年の記事は、（103）の「さくら」の連関と考えれば、（100）～（103）は寛弘五年の歌群とするのが自然ではあるまいか。（100）（101）は寛弘五年の春、彰子邸における女房中将との贈答、（102）は同じく五年春、しばらく里居をしていた時期に、中宮に紅梅を奉っての詠、更に再び出仕した四月の内裏での作（103）として納得のいくところである。式部の側のこうした推定年代と、保坂氏の伊勢大輔の初出仕推定年代を合一すると、自ら式部の寛弘三年初出仕説が強調されることともなる。

源氏物語に（102）の歌との類歌をみるに、真木柱巻の冷泉院の歌に、

九重にかすみへだてば梅の花たゞかばかりも匂ひこじとやがある。「さくら」「梅の花」の相違はあるが、「こゝのへ」に「にほふ」との用語、及び発想の類以は明らかであり、（102）の投影とみてよかろう。先に触れた、寛弘五年十一月の幻巻までの清書を思うに、真木柱巻歌は（102）の成立から程経ぬ時期に、その歌の影響下に成った歌と考えられる。

次に、前の四首に（104）の寛弘四年四月十九日の賀茂祭時の詠をはさんで後続する（105）～（107）の三首について触れる。先づ、

む月の三日、うちよりいでゝ、ふるさとのたゝしはしのほとに、こよなうちりつもりあれまさりにけるを、ことゝみもしあへす

（105）あらためてけふしもゝのゝかなしきは身のうさや又さまかはりぬる

であるが、（99）～（103）と寛弘五年詠が続き、（103）の「さくら」の連として（104）の寛弘四年歌があると思われるので、続く（105）は（99）～（103）と同年で、（104）の翌寛弘五年正月三日の里における詠歌と考えられる。恐らく（102）の寛弘五年春の宿下りと同時期のものであろう。ここで想起しておきたいことは、あの（56）の初出仕時の詠「身のうさはこゝろのうちにしたひきていまこゝのへそおもひみたるゝ」である。両者は「身のうさ」を詠んで歌趣に一のものがあり、寛弘三年十二月二十九日、初出仕という晴れがましい状況にもかかわらず、うさのみまさる自身の鬱々とした心情独白（56）があり、更に一年余後の寛弘五年正月三日、「あらためて」痛感する「身のうさ」を如何ともし難い、式部の精神の風景を看取し得よう。この二首と設定は異なるが同趣のものが、帚木巻の空蟬歌に、

身のうさを嘆くにあかであくる夜はとり重ねてぞ音も泣か

れける

とあるが、こうした式部の鬱屈した心情は日記にみる如く、宮仕期間中終始一貫したものであり、この家集が長和二年、親友小少将の君の死を加賀少納言と詠んだ、（124）「（詞書省く）くれぬまの身をはおもはて人の世のあはれをしるそかつはかなしき」（125）「たれか世になからへてみむかきとめしあとはきえせぬかたみなれとも」（式部）、（126）「返し、なき人をしのふることもいつまてそけふのあはれはあすのわか身を」（少納言）を最後に了っていることは、式部の精神風景を思うに極めて自然な現象であり、正しく家集が自撰たることを物語ると考えられる。

次に、前に続く二首、

五せちのほとまいらぬを、くちおしなとべんさいし（弁イ）やうのきみの、たまへるに

（106）めつらしときみしおもは、きて見えむすれるころものほとすきぬとも

かへし

（107）さらはきみやまゐのころもすきぬともこひしきほとにきてもみえなん

についてみるに、既に検討した如く、（100）～（105）は（104）の寛弘四年を除いて全て寛弘五年の詠と考えられ、この二首をはさんで、（108）「うちしのひ」～（113）「夜こめをも」は対宣孝の長保二年詠が挿入され、続く（114）「きくのつゆ」～（119）「なにはかり」が再び寛弘五年の作となるので、（106）（107）は、寛弘五年のものかと思われるが、寛弘五年の五節の詠は、既に（99）にあり、その折は式部は確かに中宮に出仕しているのであるから、この二首は翌寛弘六年五節時に里居していた式部に、宰相の君が帰還を促し、式部がそれに応じたものと一応考えてよさそうである。寛弘六年の詠は家集にはこれ以外に見られず、日記においても、正月一日～三日の記事と問題の消息文のみが寛弘六年分であり[注12]、寛弘六年十一月の五節時に式部が宿下りしていたとしてもこの限りでは矛盾はない。蓋し、寛弘五年の五節時詠（99）と六年五節時贈答（106）（107）の間に五年の記事を配したものと解してよいかと考える。

四

以上、四項において検討した二十首の詠作年代の推定結果は、二節の表の＊印を付した（　）内に示す通りである。こうした推定年代を含めて表の概観をするが、その前に実践本（一類本）にみられぬ陽明文庫本（二類本）に収められる歌七首の詠歌年代を一応確認しておく。（校異は南渡浩氏『紫式部集の研究』校異編を基に、他の二類本によった）

さしあはせて物思はしけなりときく人を、ひとにつたへてとふらひける　本ニやれてかたなしと

（一行分空白）

八重やまふきをおりて、ある所にたてまつれたるに（りイ）、ひとへの花のちりのこれるを、こせ給へり

（52′）おりからをひとへにめつる花の色はうすきをみつゝうすきともみす

「さしあはせて……」の詞書をもつ歌は「本ニやれてかたなしと」の如く欠歌である（これに関しては後述する）。（52′）はそ

の前後歌（51）「たか里の」（53）「きえぬまの」をみるに、実践本の（51）と（52）の間に位置する歌であり、実践本の詠歌年代に照合すると、宣孝死の翌長保四年春（51）から秋（52）にかけての詠となるが、実践本の（52）の詞書「世中のさはかしきころ、あさかほを人のもとへやるとて」中「人のもとへやるとて」の部分が、これに相当する陽明本（53）では「おなし所にたてまつるとて」とあり、（52）に対応している。あるいは陽明本のこの歌が家集の原型にあり、後脱落したものが実践本の形とも考えられよう。いづれにしても長保四年秋頃の詠として問題あるまい。

（114）いつくとも身をやるかたのしられねはうしとみつゝもなからふる哉

この歌は、その前歌四首（110）「たつきなき」～（113）「ふれはかく」をみるに、実践本の（120）～（123）の直後に相当しており、これをもって陽明本では段落があり、以下「日記歌」として十七首を挙げる。そこで、実践本（120）（121）の相撲時の贈答歌は記録でみると、諸氏の指摘される長和二年七月二十七日の詠で、続く（122）（123）の詞書「はつゆきふりたる夕くれに」は同年の初冬と考えられるので、それに続く陽明本の（114）は長和二年暮、はからずも長らえてしまった自身の命を嘆息したものとしてよかろう。同じく二類本の橘常樹本が、（112）「（詞書省く）恋しくてありふるほどのはつ雪はきえぬるかとそうたかはれける」（113）「返し、ふれはかくうさのみまさる世をしらてあれたる庭につもるはつ雪」の贈答歌の答歌を欠き、（114）を（112）の「返し」としていることをみるに、形だけからみれば、確かに（114）も（112）の答歌としても不自然ではない。（113）は常樹本以外は、一類二類全本に存するので、原型にあったものと考えられるが、あるいは（113）（114）の二首ともに（112）の答歌であったとも考えられる。常樹本の（112）の返歌（114）の形態と、この本以外の二類本に、（114）の詞書「返し」がみえないこととを合わせ考えると、（113）（114）ともに（112）の返歌と推定できる。いづれにしても（114）は長和二年暮の詠としてよいであろう。鬱々たる日々を送る式部の家集の結末にふさわしい詠歌である。幻巻巻末の源氏の歌「うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひの外になほぞ程ふる」に趣の似通ったものを看取できよう。（この節では二類本のみにある歌を採り挙げているが、この一首だけは一類本の尊円本系が具有する。）

水とりとものおもふことなけにあそひあへるを
（121）水とりをみつのうへとやよそにみむわれもうきたる世をすくしつゝ
はすの廿九日にまいり、はしめてまいりしもこよひそかしとおもひいつれは、こよなうたちなれにけるもうとましの身の程やとおもふ、夜いたうふけにけり、まへなる人々うちわたりは猶いとけはひことなり、さとにてはいまはねなまし、さもいまときくつのしけさかなと、色めかしくいふをきく
（126）としくれてわかよふけゆく風の音に心のうちのすさまし き哉

源氏物かたりおまへにあるを、殿御覧して、れいのすゝろこととともいてきたるついてに、梅のしたにしかれたるかみにかゝせ給へる

(127)すき物となにしたてれはみる人のおらてすくるはあらしとそおもふ

とてたまはせたれは

(128)人にまたおられぬ物をたれかこのすき物そとはくちならしけん

たいしらす

(131)よのなかをなになけかまし山桜花みる程のこゝろなりせは

この五首は、「日記歌」[注13]として末尾に配された十七首中の実践本にみえないもので、日記の記事により詠作年時がほぼ決定できる。先づ(121)は寛弘五年十月十余日、折りしも行幸近い晴れがましい土御門邸において一人鬱々とする式部の心情吐露であり、次に(126)は、同寛弘五年十二月二十九日、初出仕からまる二年後、はからずも宮仕生活に慣れきってしまった我が身のうとましさを、その老いの自覚として詠んだものである。(126)ほどの切迫した凄さはないが、野分巻の明石上の「おほかたに萩の葉過ぐる風の音も憂き身ひとつにしむ心ちして」との独詠にも、その「憂き身」の自覚は看取でき、宣孝没後、終始一貫した式部の人生観であろう。

次に、(127)(128)の道長式部の贈答であるが、これは前述の如く、従来の寛弘六年説が訂正され、寛弘五年五月二十三日の記事として定着しつつある「十一日の暁……」に直続する日記の記述と対応するので、それと同時期の贈答歌としてよいかと思う。特に、稲賀氏の前掲論文では、今井先生の紹介された幻中類林「光源氏物語本事」中の「佐衛門督」の「梅の花」の歌をとり挙げ、この贈答歌との関わりを重視して、寛弘五年説を提示されている。必然的に、続く「くひな」の贈答は、日記における「十一日の暁……」、「すきもの」贈答とのまとまりをみるに、これに程経ぬ時期のものとみてさしつかえあるまい。

最後に(131)は「日記歌」[注14]として収められるが、現行紫式部日記にはこの歌がみえない。これについて、萩谷氏が前著で、日記の歌ではなく、この歌を収める後拾遺集からの補遺歌であろうとされる。確かに詞書の「たいしらす」は日記から取ったにしては不自然であり、後拾遺集春上に歌題のみえないところから、これより拾遺したものとも考えられる。試みに、この歌以外に、家集、日記にみえない勅撰集採取歌を調査すると、続後撰集一、続古今集一、新千載集二の計四首で、いづれも後代の撰集であり、後拾遺集前後の時期のものはみられない。後拾遺集に収められたもので「日記歌」に漏れた歌があれば問題であるが、そうでない以上、(131)は後拾遺集より補遺されたとする萩谷説に従い得よう。

しかし、問題はこれでは終らない。即ち、後拾遺集採歌の出所が次の問題となるが、先の四首のうち、続後撰集収載歌は現存伊勢大輔集にみえるものであり、新千載集所収歌の一も同じく伊勢大輔集に、更に続古今集収載歌は栄華物語に夫々見えるものである。(残る今一つの新千載集恋五(一五四八)所見、「題しらず、かき絶えて人も悄の歟こそ果はあはでの杜となりけれ」は従来指摘されるように、詠み

口が式部のものと異質であり、式部の作か否か少しく疑問であるので、ここでは触れない）しかし、（131）だけは他の集に所見がない。式部の作品で勅撰集採歌の材料となるものは、物語は外すのが原則なので、日記と家集以外にはないと一応考えてよかろう。因みに後拾遺集所載の紫式部の歌は、家集のみにみえる歌二首、日記、家集ともにみえる歌一首で、（131）も同様に家集又は日記から採られた可能性が大きい。ところが前記の如く、日記歌とするには疑問があるとすれば、それを家集に求めるほかないと考えられる。そこで家集中、南波氏が「紫式部集の研究　校異編　伝本研究編」に挙げられる欠落部分の最小の範囲で欠歌の認められる箇所を調査すると、（17）「（詞書省く）なにはかたむれたるとりのもろともにたちゐるものとおもはましかは」の答歌、前述した（52）の直前の、詞書「さしあはせて……」をもつ歌、同じく前記した（62）（実践本（78））の答歌、（63）（実践本（79））の贈歌の四箇所があるが、このうち（17）の答歌は、肥前に下った女友達が式部を恋しく思い、ともに居られないことの無念を消息したものに対応する必要があるが、（131）はそれを満たさず、用語上の対応も認められないので、とれない。又、（62）（63）に関わる贈答歌は、夜がれのつらさを訴える式部に応ずる宣孝の歌でなければならないので、（131）とは歌趣が合わない。そこで、残る（52）の前に位置する「さしあはせて物思はしけなりときく人を、ひとにつたへてとふらひける」との詞書のみある「（一行分空白）」に（131）を配すると、少なくとも歌趣の上で矛盾はない（歌の「山桜」が詞書にみえないのは多少疑問がある）。

本来、（52）の歌（前記のように、実践本（51）（52）の間の歌、長保四年秋詠）の直前に「さしあはせて……」の詞書をもって位置していた（131）が、その段階で後拾遺集に採歌され、後、家集から歌のみ欠落したところを、後人により家集、日記の漏歌として、「日記歌」に含めて後拾遺集より補遺されたとみることは無理ではなさそうである。

これより、（131）は（52）と前後する長保四年春頃の詠であること、及び、「日記歌」の後人補遺は、後拾遺集成立（永承二年～康和元年）以降と一応推定できるのではあるまいか。もっともこの場合、「さしあはせて……」の詞書が何故に後拾遺集に採られなかったかは問題であるが、これに対して明白な解答を私は持たない。編者の編纂の姿勢によるものと考えることは可能であるが、これは後拾遺集の詞書を具に検討しなければ何とも言えない。一応臆説という形で提示しておきたい。

前に現存分の紫式部集にみられる欠落部分の最小の範囲で論述すると前提したが、更に大幅な落丁の可能性があるので、それを含めて考えれば、問題は違ってくるかもしれない。さらにつっこんだ書誌的な操作が必要であるが、現段階ではそうした究明の手段を私はもたない。そこで最小範囲の欠落部分における推定に止まったため、以上の推論は、弱点をもつことを禁じ得ない。

五

以上、一類本の善本実践女子大本を底本として、詠作年代未詳歌についての推定、及び二類本の陽明文庫本によって、それに漏れた歌七首の詠作年時の推定を日記等により試みたのであ

るが、最後に紫式部集の配列を概観してみたい。微細な箇所にまで言及することは、紙幅の関係上困難なので、それは後の機会を待つとして、ここでは巨視的な概観に止めて、基本的な年代順配列に反する箇所をとりあげて検討する。二節の表に示すように、大きく五ヶ所の年代順序の移動がみられるが、以下順次触れていくこととする。

先づ、第一に（3）の歌であるが、これについてはその項で述べた如く、（2）の「虫の音」の類纂であり、そのために寛弘四年とおぼしき詠が（1）～（12）の長徳元年の歌群に挿入されたものであろう。特に錯簡とする必要はない。

第二に、（44）～（47）の四首については、同じくその項で述べたので、再び繰り返すことを避けるが、長保元年二年（44）（45）から同四年（48）の年代の流れの中に、歌趣よりみてかなり後の詠と思われる（46）（47）を挿入して、歌絵に関わる（44）～（48）の五首を類纂したものである。

第三に、（56）以降は原則として出仕以後の詠が配されているが、その中に、宣孝に関わる歌が三群見出だされる。これについて、「紫式部集の復元とその恋愛歌」において今井先生の御指摘になった、宮仕以前以後の恋愛歌の不均衡を是正せんがために、年代順配列を超えて宮仕以後の位置に配されたとする説に基本的には従いつつ、その前後歌との関わりに、少しく関心を抱かせるものがあるので、それについて述べる。

その一は、（78）「わするゝは」～（85）「みねさむみ」の歌群である。（78）（79）は長保二年時の頻繁になった宣孝の夜がれを詰る歌二首で、それ以前の寛弘五年の記事の連からみて唐突な感を与えるが、（74）「夜もすから」（75）「たゝならし」及び（76）「をみなへし」（77）「しらつゆは」の道長との戯れの贈答の連想下に、（78）（79）の夫の夜がれの難詰があったと考えられる。宣孝を介して、続く（80）～（82）はその宣孝との結婚を目した越前からの帰路（長徳三年秋冬）の詠、更にその宣孝との結婚直前における交渉を歌った（83）～（85）と続けており、錯簡ではなく、道長との遊戯的な贈答の延長線上に夫を浮かべた式部の連想的、意志的配列であろう。

次にその二として、（90）「おり〳〵に」～（98）「こゝろゆく」の一群があるが、宣孝との結婚前の交渉（90）（91）、結婚以後、夫の夜がれの繁しい頃の詠（92）～（94）、その頃生まれた賢子のために夫の夜がれを悲しむ母の情（95）、夜がれを原因として病悩する式部（96）～（98）と、宣孝との結婚を中心とした一つのストーリー性をもたせた配列となっている。作者の意図的な配列であろう。（90）とその前歌、（98）とその続歌とには、前項のような年代を超えと配列されることの必然性がみられず、季の推移もちぐはぐであるのは、恋愛歌の分散に急なるがための作者の不用意と解される。

最後に、（108）「うちしのひ」～（113）「夜こめをも」の一連があるが、これらはいづれも宣孝の夜がれを詠んだものであり、長保二年七月朔日（108）（109）、同月七日（110）（111）、月は定かでないが、この前後の時の詠（112）、加えて（113）のこの年の秋頃の歌と、季の推移順に配列され、夫の夜がれを嘆く妻の鬱屈した独白がこの形を呈したものと考えられよう。ここにも前項に同じく、これら歌群の前後歌との関わりが稀薄で

あるが、原因は前項と同様であろう。

以上、年代順配列に大きく反する五ヶ所の歌群を考察してきたが、特筆すべきものに、後の三項の恋愛歌群がある。こうした贈答の式部の相手は、これまでの検証の如く、夫宣孝と考えられ、(78)以前の恋の相手も、(49)「世とゝもに」～(51)「たかきとの」の夫死後すぐに式部の前にあらわれた男(この男とのその後の進展のないことは前記した)以外、すべて宣孝であるが、このように、対宣孝の歌を全体に分散させ、その名を伏せることにより、紫式部の家の集全体があたかも一つの虚構された恋物語の態をみせている。蓋し、物語作者式部の面目躍如と言い得よう。

家集の編纂意識については一首一首の細かい検討が為されなければならないが、概略すると、以上のことが一応確認できるところである。

注

(1)岡一男氏『源氏物語の基礎的研究』(昭和二十九年一月)、角田文衛氏『紫式部とその時代』(昭和四十一年五月)、今井源衛先生『紫式部』(昭和四十一年三月)『王朝文学の研究』(昭和四十五年十月)、竹内美千代氏『紫式部集評釈』(昭和四十四年六月)、南波浩氏『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』(昭和四十七年九月)、清水好子氏『紫式部』(昭和四十八年四月)(尚、以下引用する諸氏の説は、ことわらない場合右による)

(2)家集と源氏物語との歌の類似関係については、既に今井先生が「源氏物語と紫式部集」(『王朝文学の研究』所収)において詳細に提示されて、「朝顔と夕顔―宣孝関係の紫式部歌と源氏物語―」(『日本文学』昭和四十八年十学)で鬼東隆昭氏により、それの補遺がなされているが、本稿では、新たな発見のいくつかを提出する。

(3)「紫式部集の復元とその恋愛歌」(『王朝文学の研究』所収)

(4)式部の出生年度について、岡氏は天延元年(九七三)説、今井先生はこれより三年早い天禄元年(九七〇)説を提示される。

(5)初出仕の年代については諸説ある。それが寛弘五年より前の年の十二月二十九日であったことは日記により明らかであるが、その年次については、与謝野晶子、萩谷朴(『紫式部日記全注釈』下)、清水好子諸氏の寛弘三年説、紫家七論を踏まえた五十嵐、池田亀鑑両氏の寛弘二、三年説、足立稲直氏の『紫式部日記解』を進めた今小路、島津両氏の寛弘四年説、更に岡一男氏、今井先生の寛弘二年説と、説の対立がみられる。私は萩谷氏の挙げられる寛弘二年十一月十五日の内裏火災を重くみて、整寛弘三年、新築の内裏に式部が出仕したとみる。

(6)今井源衛先生『紫式部』

(7)「源氏物語と紫式部集」

(8)同(3)

(9)私は玉鬘系後期挿入説をとらず、桐壺巻から順次執筆されたとみる。

(10)今井源衛先生 同(7)

(11)「伊勢大輔とその周辺」(『学苑』昭和三十年一月)

(12)消息文に続く「十一日の暁……」の記事は、金子武雄氏「紫式部日記考」(『立教大学日本文学』五号)、池田健夫氏「紫式部日記『十一日の暁……』の記事は寛弘五年のこと」(『国文学』昭和四十一年九月)、萩谷朴氏(前著)、稲賀敬二氏「紫式部日記逸文資料『左衛門督』の『梅の花』の歌――日記の成立と性格をめぐる臆説」(『国語と国文学』昭和四十六年四月)等により、

従来の寛弘六年説が否定され、首欠説とあいまって、寛弘五年五月二十三日説が有力といえよう。（萩谷氏は五月二十二日、稲賀氏は五月五日説をとられる）

（13）「日記歌」については、小沢正夫氏の「紫式部日記考」（『国語と国文学』昭和十一年十一月、日本文学研究資料叢書『源氏物語』二に所収）における「最初から異本紫式部集の附録として編まれたとも考へられるのである。即ち紫式部の家の集を編纂しようとした後人が、異本式部集と式部日記とを手にして、異本式部集に漏れてゐる日記の歌を『集』の巻尾に増補したのではないだろうか」とする説が、その後、池田亀鑑氏「紫式部日記歌と家集について」（『学苑』五十三号、昭和二十八年）の支持を得て、現在有力となっている。

（14）この歌以外に、寛弘五年四月～五月の三十講時の詠五首が「日記歌」にありながら、現行日記にはみえないが、これについては日記首欠とする説に従う。

受贈雑誌（昭和四九年一月～六月）

文化と言語（札幌大）6巻1／札幌大学教養部紀要5／人文論究（函館人文学会）34／藤女子大学国文学雑誌15／語学文学（北海道教育大）12／国語国文学研究（北海道大）51／学園論集（北海学園大）24／国学研究（東北大）13／文化（東北大）37巻4／文芸研究（東北大）75／文経論叢（弘前大）9巻1／日本文学ノート（宮城学院女子大）9／宮城教育大学国語国文5／国語と国文学（東京大）51巻1～7／実践国文学5／論究日本文学（立命館大）37／立命館文学331～342／学芸国語国文学（東京学芸大）9／国語国文学会誌（学習院大）17／学習院大学文学部研究年報20／東京女子大学日本文学40／41／人文学報（都立大）96／日本文学研究（大東文化大）13／清泉女子大学紀要21／言語文化（一橋大）10／一橋論叢70巻5～71巻5／国文学研究（早稲田大）52／53／文芸と批評（同人会）4巻2／並人の里（同会）9／演劇学（早稲田大）15／国学院雑誌74巻11～75巻3／国学院大学日本文化研究所紀要33／国学院大学紀要12／国学院大学文学研究科論集1／語文（日本大学）39／研究紀要（日大人文科学研究所）16／上智大学国文学論集7／国語国文論集（安田女子大）3／4／駒沢国文10／11／文芸論叢（立正女子短大）10／国文白百合5／成蹊大学文学部紀要9／国文（お茶の水女子大）40／文芸研究（明治大）30／31／人文科学研究所年報（明治大）14／紀要（中央大文学部）33／人文研究（神奈川大）55～57／横浜市立大論叢24巻1～3／東横国文学（東横学園女子短大）6